

とらうべ

13,000人の赤ちゃんをとりあげた助産婦の母

栗原 稔

会社員(大分県別府市)

産婆と看護婦の試験に合格していた母は、産婆の祖母(父の母)のもとへ実地見習いのために身を寄せた。昭和10年10月、ちょうど20歳を迎えた年だった。

以来、平成6年に助産婦人生最後の赤ちゃんをとりあげてこの仕事に終止符を打つまでの約60年間に、1万3千人の新生児の出産にかかわってきた。

戦前、戦中、戦後と、日本社会がその歴史において最も激しく変化する時代に、助産婦として生きてきたことになる。「お産婆さん」から「助産婦さん」へ、また「自宅分娩」から「施設分娩」へ。お産の世界が最も変化した時代だったのではないだろうか。

今、86歳。静かに余生を過ごしている。

私は、次男として昭和19年9月に生まれた。終戦の1年前である。したがって戦後ずっと、視界の範囲内で助産婦としての母を見続けてきたことになる。

歴史を語るものとして大切に保存されている数冊の助産記録によると、昭和22年・23年・24年の3年間は、1年間の出産取り扱い数が450人を超えている。毎日お産があった。母に聞いたのだが、1日に5人も生まれたことがあったそうである。昭和43年までは、年間200人以上の出産を取り扱っている。

私の子供時代の記憶の中には、お乳を求めて赤い顔をさらに赤くして泣く新生児の姿が絶え間なく続いている。常に家の中に出産間近の妊婦

さんとお産を終えてほっとしている産婦さんが身体を横たえていた。

統計によると、日本では昭和35

年を境にして施設内分娩が施設外分娩より多くなっている。私が小学生だった頃、母は「せんせー陣痛が始まって生まれそーだ。来てくださーい」と呼びに来られ、白い風呂敷に助産道具を手際よく包んで小走りに出かけていく風景をよく見た。

忙しい母だった。ゆっくりくつろいでいる母の姿は、記憶の中にはない。

50代半ばになった私が、未だに謎と思えるのは、当時助産婦の仕事だけでも多忙を極めていたはずなのに、さらにPTAの役員を引き受け、婦人会の世話をし、公民館活動に奔走していたことだ。赤ちゃんが生まれそうになっているのに、行方がわからない母によくやきもきさせられた。

そんな働き詰めの母の背中を見て教えられたことは2つある。

ひとつは「人のお世話を進んでする」ということ。人の世話は買ってでもせよという人もいるが、それは相手を元気づけるだけでなく、同時に自分も元気づけられているのである。お世話をすることとは大変なことであるが、人間関係が希薄になりつつある現代だからこそ、だいじなことと思う。

2つめは「女性も何か資格を手にする」ということ。そばで見ているとこちらが疲れるくらい忙しい母だったが、働いている姿は実に生き生きしていた。そんな環境にあった私は、自然に助産婦を志す女性を妻とした(現在は看護専門学校の教員として勤務しているが)。

そして今、私の娘たちもそれぞれに資格をもち、自立の道を歩んでくれている。

